

基本的に、共通教育の開講は吉田キャンパスが中心となっているが、国際展開分野科目は小串キャンパスで行われる。また、医学部の学生は1年次に吉田キャンパスで共通教育を履修し、2年次以降にそれぞれのキャンパスに戻っていく。

山口大学の共通教育の特色は、4つの目標に示されている。(1)「驚き」：驚きを大切にし、「自ら」が考え・判断・表現・行動・発言する能力を養う。(2)「個性」：個性を大切にし、心身共に豊かな人間性と＜美＞を発見するところをはぐくむ。(3)「出会いと交流」：出会いと交流の中で、歴史と伝統を重んじつつ、異文化を受け入れるところを養い、地域社会と国際社会への責任感や義務感を培う。(4)「夢」：夢を描き続け、自らが生涯を通じての＜知の探求者＞になる「礎」を築く。また、「教養コア科目」として、1年次（知の広場）と3年次（キャリア教育、就職活動前に実施）で各1単位のキャリア教育科目が必修となっていることも大きな特徴の一つである（山口大学大学教育センター、2014）。

(5) 運営実態・課題対応

H25年度に実施された新たな共通教育の推進は、多くの課題へと対応する中で展開している。具体的な課題は以下の通りである。

①課題1：従来の教養教育との単位数の差

山口大学の従来の教養教育では4年間に学生が42単位（医学部60単位に近く）を履修する必要があるが、全学的に30単位に統一すると、12単位の差が出てくる。こうした課題に対する解決策として、特定履修対象の「専門基礎系列」・「教職基礎系列」の共通教育科目で差分の科目数を履修することとした。具体的には、理系の学生は、数学・物理等の理系基礎分野科目、教育職員を目指す学生は、教職基礎系列の科目を履修することになる。特に、教員免許取得希望者（教育学部の学生を除く）が教育免許を取得するための体育科目2単位は、1単位が教養コア系列「運動健康科学」、1単位が教職基礎系列「スポーツ運動実習」として提供される。

②課題2：共通教育と専門教育の位置付け

前述した特定履修対象の「専門基礎系列」・「教職基礎系列」の共通教育科目は、従来は各学部の基礎科目であったが、こうした基礎科目を担当できる教員が、全学部にいるわけではない。

H25年度に実施された新たな共通教育では、全学必修の共通教育科目を提供するため、1部局（1学部）は全ての1年次学生に基礎科目を提供することにより、全ての専門基礎科目は、各学部での専門性をもつ教員が担当することとなった。そのため、こうした専門基礎系列科目は、従来の「専門系列の中での基礎科目」ではなく、「共通教育の中での専門教育系列」に位置付け直された。

③課題3：外国語科目の調整

外国語科目は、最終的に英語のみとなっている。当初、中国語やドイツ語を必修としたい部局もあったが、英語以外の外国語は、非常勤講師へ依存する形になってしまい、履修学生も少なく、開講できない状況も考えられた。そのため、大学の経営的な理由により、共通教育の実施にあたって、非常勤講師の抑制に努めるため、外国語教育は、世界的共通語である英語のみを必修とすることが決定された。

④課題4：卒業に必要な単位に算入されない教養展開系列科目

H26年度は、教養展開系列科目が開講されているが、現状は履修しても卒業に必要な単位に算入されない。①国際展開分野：英語力をより高めたい学生のため、英語のみの国際展開分野科目を設置。②地域展開分野：将来的にCOC事業へ応募することも見越して、地域展開分野科目を開講。③知財展開分野：知的財産についての幅広い知識を習得するために設定された。

⑤課題5：「 Semester制」から「Quarter制」へ

全学必修の共通教育科目30単位を「基礎セミナー」と「英語」の一部を除き、「Quarter制」で実施する。Quarter授業を実施する学期および授業期間は図5-2の通りである。

Quarter授業を採用する理由は大きく2つある。まず、共通教育は、高校の授業と大学授業の橋渡しの役割であり、Semester制で深く学ぶ授業より、広く浅く学ぶQuarter制の方が望ましいという理由である。例えば、哲学は、哲学理論より、哲学の見方・考え方等の授業が望ましい。また、奇数単位数と偶数単位数を提供する部局が混在しており、QuarterとSemester制が混在する形になっていたのを、全体的にQuarter授業へと切り替えて単位数を整理することがもう1つの理由である。

また、Semester制を採用する科目は次の通りである。教養コア系列「基礎セミナー」は2単位なのでSemester制を採用し、15回の授業となっている。他には、英語系列の一部の授業でも、週1回2単位のSemester制となっている(English Speaking, 英語リーディング, 英語ライティング, 英語特別演習, Comprehensive English)。

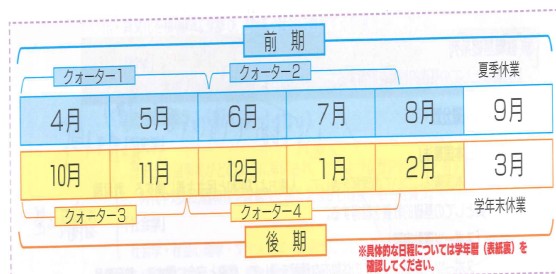


図5-2 Quarter授業の実施学期および授業時間

出典：山口大学大学教育センター（2014）「平成26年度共通教育履修案内（一年次の学生用）」

⑥課題6：授業の評価

山口大学の共通科目改革は、「学生が共通してもつべき素養・能力の明確化」が目的の一つであるが、授業の内容・シラバス等を共通化しても、成績の評価の「共通化」は、課題となっている。

共通科目における同様の科目を受けても、異なる評価が生まれる可能性がある。こうした状況の下で、一部の教員は、2014年の9月に第3・4クォーターにおける一部の科目で「ルーブリック」評価を試行した。「ルーブリック」は、「学習者のパフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述で構成される。評価基準の記述形式」である。そのため、ルーブリック評価は、科目の成績評価（総括的評価）の公平性、客観性、厳格性を増大させるのみならず、学生への事前提示やフィードバックを通して日常的な形成的評価やライティング・センター等の他機関との協働学習支援にも有効であると言われている（沖，2014）。利用方法の例として、「山口と世界」科目では、教員がルーブリックを開発して、そのルーブリックを学生に提示している。山口大学では、こうしたルーブリック評価が導入後3年で浸透・定着すると見込んでいると「山口と世界」の担当教員である糸長氏が述べた。

ルーブリック評価には、成績評価の公平性、客観性、厳格性を増大させることが期待されるが、他方で山口大学の共通科目はクォーター授業であるので、教員はわずか8回の授業でいかなる方法で学生の成績を評価することが可能であるか、という課題が残ると糸長氏は指摘した。

⑦ 課題7：抽選制・TAの採用

共通教育のクラスは、「クラス指定」と「クラス選択」といった形式がある。第2クォーター以降に開講する一般教養科目には「クラス」と「クラス選択」²⁾がある。

共通科目は、同時に複数の授業を開講するので、開講の定員を超える場合が生まれる。そこで、山口大学では抽選制を敷き、可能な限りバランスが取れるようなシステムを採用している。しかし、山口大学の共通科目は授業回数が僅か8回なので、第1学期第1週の授業でオリエンテーションと抽選・教室調整等を行うような無駄が発生しないよう、抽選制は第2クォーターから行う。そのため、第1クォーターで開講する科目はすべて「クラス指定」とする。これは過去の経験に基づく試行錯誤の結果であると担当者の松本氏は述べている。

また受講生が100人を超えた授業では、授業の進行や成績評価に係る教員の負担を減少するため、TAが採用されることもある。

5. 「共通教育」の成果・今後の課題

事業の成果について、まず授業外の学修時間の増加を指摘すべきである。クォーター制授業では、1単位8回の授業であり、試験とレポートの回数が増えたので、学生の学修時間

が増加してきた。また、授業の課題が増えたので、授業に参加している学生が増えたという声が教員から上がっているという。

実際には、山口大学での調査においても、授業外学習時間（全体平均）の経年変化を見ると（図 5-3 参照）、1 回あたりの授業外学習時間が 30～50 分程度の授業が大半という状況が見られる。

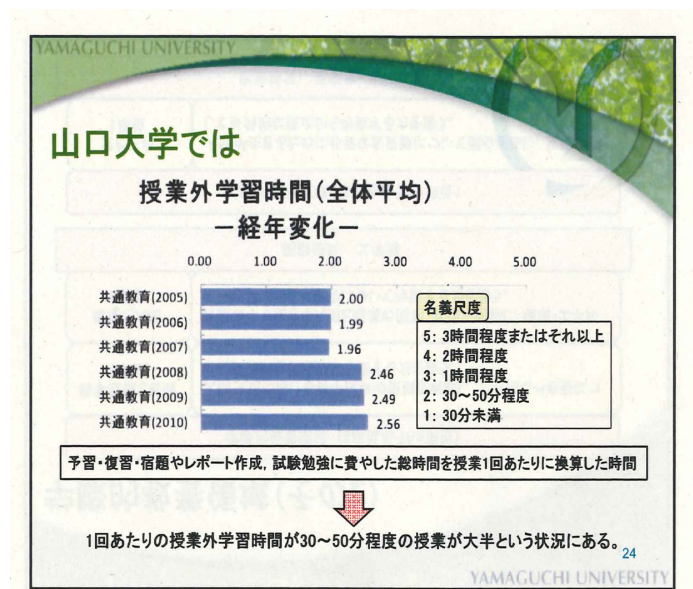


図 5-3 山口大学における授業外学習時間（全体平均-経年変化-）

出典：糸長雅弘（2013）「山口大学の取組み」第 61 回中国・四国地区大学教育研究会シンポジウム第 1 部

また、学生による評価について、学生へのアンケート結果は、まだ公表されていないが、全体的にはプラス評価となっているという。実施の早期段階では、学生からの抵抗もあったが、実際に授業を受けてからは、専門外の分野が見えてきた、よかったという意見もあると、林氏が行ったアンケート調査に表れていたという。一方、教員による評価については「自分がやりたいことをやれない」という文系の教員からの声が少なくないが、企業側は将来専門職・総合職に就く学生に、幅広く教養が求められていると述べており、今後も共通教育の推進が求められていくことになるだろう。

さらに、山口大学教育学部は 2014 年 9 月から始まった後期授業の一部で、「反転授業」の要素を盛り込んだ知財教育を行っている³⁾。同科目は、8 回の授業を大きく 2 部に分けて実施された。まず、視聴ビデオを反転教材として、学内・自宅・その他から利用可能といった形式で実施している。また、第 2 回から第 4 回の授業冒頭で確認試験を実施した。視聴ビデオおよび確認試験の授業をそれぞれ実験群および統制群を分けて実施した。効果測定の結果は、視聴ビデオの e-learning では実験群の得点が高くなっているとみられる。ただし、統計的な検定は行われておらず、「わずかながら反転の効果が表れていると推定でき

るかもしれない」という結果に留まっている（当日ポスター資料より）。

共通教育が求められている一方で、山口大学の共通教育は、課題を生み出してもいると糸長氏が指摘した。まず、共通教育の履修年次について、1年次で全ての共通教育を履修完了するのが理想的であるが、CAP 制をひいている学部では、1年次に全て履修できない場合もあり、2年次で履修することになる。学生の負担にならないように、1年次で履修完了になるような体制に見直すべきであるとされている。

また、国際教養展開の単位問題をあげられる。国際教養展開科目は、英語能力が高い学生向けの授業なので、卒業に必要な単位に算入されないという問題も、今後の課題となる⁴⁾。

6. インプリケーション

山口大学は政策的な誘導に先んじて3つのポリシーを制定するなど、文字通り教育改革を先導する役割を果たしてきた。そんなトップランナーの山口大学だからこそ、模倣するための手がかりのない、新しい問題に次々と直面することになっている。

山口大学のこれまでの道のりは、大学教育改革の取組みを制度化していくプロセスで、さまざまな課題が浮上し、その課題に順次対応していく試行錯誤の過程であった。こうした山口大学の道程は、内容的に大学教育改革に関する先駆的事例であるのみならず、課題解決のプロセス面でも有益な教材となり得るのではないか。

<注>

1) 5つのセンターは、大学教育センター・アドミッションセンター・学生支援センター・保健管理センター・留学生センターである。

2) ここで、「クラス選択」とは、同一の曜日・時限において複数の開設科目があるときに、その中から選択できることをいう。

3) この事例は、関西大学で行われた大学教育改革に関するシンポジウム「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか？」で報告されたものである。

4) ここで指摘された課題以外に、「質を伴った学修時間の実質的な増加・確保」、「教育課程の体系化」、「教育方法の改善」、「成績評価の平準化と厳格化」、「教員の教育力の向上」、「学習成果の把握」、「各学部の出動率の平準化」、「共通教育に対する新たなニーズへの対応」といった課題が残る（糸長，2013）。

<参考文献>

糸長雅弘（2013）「山口大学の取組み」第61回中国・四国地区大学教育研究会シンポジウム第1部

小川勤（2010）「学士課程教育の質保証のための組織的カリキュラム改善の取組—「教育

改善 FD 研修会」を通じたカリキュラム改善の試みー」京都大学高等教育研究第 16 号
沖裕貴（2014）「大学におけるルーブリック評価導入の実際」、『立命館高等教育研究』
第 14 号，立命館大学
濱名篤・川嶋太津尾・山田礼子・小笠原正明編（2013）『大学改革を成功に導くキーワー
ド 30』学事出版
山口大学（2015）「2015 山口大学案内」
山口大学（2011）「目標達成型大学教育改善プログラム取組成果報告書」山口大学大学教
育機構
山口大学大学教育センター（2014）「平成 26 年度共通教育履修案内（一年次の学生用）」